

## 第2回 東京芸術文化評議会 議事要旨

- 1 日 時 平成19年8月30日（木）午後2時から午後4時まで
- 2 場 所 東京都庁第一本庁舎7階 大会議室
- 3 出席者 石原都知事  
安藤評議員、杉本評議員、鳥海評議員、蜷川評議員、野村評議員、  
福田評議員、福原評議員、三宅評議員、宮本評議員、森評議員  
逢坂専門委員、太下専門委員、片山専門委員、菅野専門委員、杉浦専門委員、  
高萩専門委員、長田専門委員、西巻専門員、吉本専門委員
- 4 次 第
  - (1) 部会からの提案
  - (2) キャッチコピー
  - (3) 東京キャンペーンマーク制作
  - (4) オリンピック文化プログラム《非公開》

### 5 発言要旨

福原会長

ただいまから第2回の東京芸術文化評議会を開催いたします。

本日は、本当にありがたいことに、評議員全員にご出席をいただきました。大変充実した会議を持てると思って喜んでおります。よろしくお願ひいたします。

最初に、事務局から資料の確認と説明をお願いします。

杉谷文化振興部長

〔配布資料の確認と説明〕

福原会長

第1回の評議会を開かせていただきましてから、事務局と専門部会の皆さんにご努力をいただきまして、資料だけでも膨大になってしまったわけですが、できるだけ手短かに、また、内容濃く皆様にご説明と討議をしていきたいと考えております。

本日の議事でございますが、最後に、オリンピック文化プログラムについて皆様のご意見をいただくことになっております。

この件については、各立候補都市と競い合う内容でございますので、I O Cに提出

するまでは伏せておく必要があるかと考えております。この件につきましてだけ、運営要綱に基づき非公開とすべきではないかと存じますが、いかがでございでしょうか。

それでは、そのようにさせていただきます。

まず部会からの提案でございますが、先ほどお話し申し上げたように、この間に専門委員で構成する3つの部会で議論を進めていただきました。今日は、そのうち第1が、世界文化都市・東京の実現とオリンピック招致機運醸成のための文化事業、第2に、平成24年度からのリニューアルをして開館する予定であります東京都美術館の新規事業、上野の東京都美術館でございます。第3に、助成金の予算規模というのは現在極めて少ないわけでございますが、そういう課題の多い芸術文化発信事業助成の見直しについて、専門部会で議論した結果を、太下文化事業検討部会長と、吉本文化制度検討部会長代理に簡略にご説明をいただきたいと存じます。

太下専門委員

〔文化事業検討部会からの報告〕

吉本専門委員

〔文化制度検討部会からの報告〕

福原会長

ありがとうございました。これは前回第1回の評議会で皆様からご提案のあったものも含めて、両方の専門部会で検討したものでございます。

両部会の報告について、皆様にご発言をいただきたいと存じます。

宮本評議員

補足をさせていただきます。「ミュージック ウィークス イン トーキョー」並びに「海外批評家 in レジデンス」は専門委員の西巻さんから強く出てきた意見です。前回第1回的时候にも、石原都知事に、日本はマーケットとしてだけしか認められていなくて、なかなか発信が遅れているのではないか、いいかげんな演奏をされているのではないかというご心配があって、確かにそういうことはあるかなというふうにも思いました。それへの手当てとして考えて出てきたのがこの意見です。東京で演奏会、コンサートをやっても、それが国の中だけで、あるいは東京の中だけでおさまってしまうということになっております。それを打開するためには、海外の音楽誌ないしは新聞にコラムを持っている方がある程度長期的な期間、数週間でも構わないのですが、

複数人、例えばシフトで来ていただいて、さまざまな音楽分野のことを、ご自分がいつもコラムを書いている新聞あるいは音楽誌等々に発表していただく。そうすれば、例えば海外からの演奏家が日本に来て、もしいいかげんな演奏をするというようなことがあれば、即ニューヨーク、あるいはロンドン、あるいはパリ、あるいはミュンヘン、ベルリンで逐一報告されてしまう。そのためだけではないけれども、いろいろなことが行われているということを海外に強く発信することがとても肝要なことと思っています。そうでないと、いつまでも内で燃えているだけになってしまうので、外へ向かっていくためには、外に確実に結果が届いているということが必要なのだと思います。そのためには、例えばデジタル回線を使って映像等々で、ちょうど大リーグが日本で中継されるように、何らかの方法で向こうにも発表していけば、海外でもリアルタイムないしはかなり至近距離から、東京で行われていることがわかるような状態になります。そうすれば、知事のご心配になっていたような、利用されているだけでお金ばかり持っていかれるのではないかというようなことは一部解消されるような気がいたしております。

福原会長

ありがとうございます。これまでもイベントごとにどなたかお一人かお二人をお呼びして発信していただくということはあったわけですが、今のご提案は全く新しい話で、批評家、評論家の方々を何人か、東京全体を紹介するために来ていただくというアイデアだと思っております。

野村評議員から、この前、「和の空間」という話がありましたが、ここには具体的にないということです。何かもう少し……。

野村評議員

是非、おいおい提案いたしますので、実現を期待いたしております。

福原会長

子どもの伝統芸能の話も……。

野村評議員

いささか私事で恐縮ですけれども、戦前から狂言が国語の教材に取り上げられているということで、全国津々浦々巡演をいたしました。そのときに、子どもとの一期一会といいますが、誠に感動的な心のふれあいというものをたびたび経験しました。今日、自分の舞台とか芸を考えていくときに、そのときの感動が原点になっているとつくづく感じてお

ります。

そういうことから、「子どもの伝統芸能ワークショップ」というものが、先程ご報告のあった予算の拡充が是非ともなされて、もっと大々的に広範囲に展開していただけたらと思います。

具体的には、国立能楽堂をはじめ、都内にあるいろいろな能楽堂というものに全面的に協力をしてもらって、なるべく子どもたちにぜいたくな空間といいますが、ぜいたくな環境の中でワークショップを行ってくださって、そして、それが1年に1遍ぐらひは子どもたちが集まって生き生きとした発表ができる。能だけでなく多様な伝統文化を含め、都の文化発信の目玉といいますが、柱といいますが、そういうものになっていくことを是非ご期待申し上げたいと思います。

福原会長

ありがとうございます。この前、「和の空間」というご提案がありましたが、今の話を伺うと、ハードウエアとしての空間を造ることよりも、現在あるものをどのよう

に機会を提供していくかということになってくるかと思ひます。

森評議員

「六本木アート・ナイト」を提案させていただきましたけれども、これはパリのニユー・ブランシュという1日だけの夜のイベントから発想を得たものです。美術の展覧会というのは主に美術館の中で行われることが多くて、わざわざそこに行かないと見られない。また昼間がメインで、夜になると全部閉まってしまひますが、それと逆の発想で、公共の場にアートを持ち出して、そこに皆がじかに触れて楽しむ、大人も子どもも楽しむという、そういうイベントを東京でもできないかと思ひております。

1日でも2日でも、とりあえずは六本木中心、渋谷、青山、その辺を中心にして広げて、継続していければいいと思ひています。公共の場を使うという意味では、それぞれの美術館がやっているのではとてもできなくて、東京都にぜひ共催していただきたい。公共の場を使ひますと、規制もいろいろありますし、なかなか難しい問題を抱えまひるので、それには東京都が主体になってやっていただきたいと思ひております。継続していく、また地域的にも広げていくためには、東京都の行政の中にしっかりした組織を持っていただきたいなと思ひております。情報の蓄積とか、専門性、そういうものが大事なので、そこを主体にして継続して広げていけたらいいと思ひます。

福原会長

ありがとうございます。ニュー・ブランシュは何年前から行われてきましたか。

森評議員

2002年にパリで初めて行われたことで、24時間やるそうです。東京で24時間できるかどうかというのは、また検討の余地があると思いますけれども、せめてミッドナイトまでとか……。

福原会長

これは、聞いたところによると、だれでも無料なわけですね。各館でもって、ロビーや何かでいろいろな催しがあるということなので、普段、美術館に行ったことのない人も足を踏み入れる場になるというところが一つの狙いですね。

森評議員

地域的に広がりを持たせてやる。そして、誰でも参加できるというのが大変楽しいイベントになるのではないかと思います。

福原会長

ですから、たしか航空会社でも、ニュー・ブランシュに行こうというようなコンセプトでツアーを組んでいるようなところもあるみたいです。

森評議員

交通機関も協力していただかなきゃなりませんし……。

福原会長

観光目的と、若者ばかりではないですが、市民の美術館に行こうというような意識を盛り上げるということだと伺っております。ありがとうございました。

福田評議員

東京都美術館の話がありました。ニュー・ブランシュの話とも通じると思いますが、例えば金沢なんかは美術館がとてもうまくいっていると思います。あれは何が良いかというと、フリーのところと有料のところがあって、普通、フリーで入ってもまあまあ楽しめるし、幼稚園生とかが楽しめて、もっと深いところを見たいときは入場料を払って入る。大きい箱があって、入場料を取って、中に入って並んで見て、という具体的な美術館のイメージを変えるものが出てくると、本当に違うものになるのではないかと考えています。

福原会長

ありがとうございます。おっしゃるとおりで、金沢は、本当にそういう意味では良

くできていると思います。六本木の新美術館も、国立ですけれども、これもフリーゾーンと有料ゾーンとがうまくコンビネーションをつくっているということで、美術館の一つの流れみたいなのところがありますね。

石原知事

勘三郎さんが、自前で掘っ立て小屋みたいなものを造って、あちこちでやっているのですか。

野村評議員

中村座。

石原知事

幾つか候補地を挙げまして、小屋を造ってほしい、それも、べらぼうなものではなくてよく、彼に言わせると、花道はなくても歌舞伎はできないことはないし、お能だって袖の道がなくなってもできるはずだと。それから、寄席がこのごろ廃れちゃったので落語もできる、800人から700人ぐらいの小屋を造れないかという話をしていました。

造るのはある意味では易しいのです。東京都は土地を持っていますし、それから、劇場のない例えば三多摩のようなところに造ってあげるのも良いことだと思います。しかるに、それをどういうふうに運営するかということで、箱も機能、形みたいなものはやはり考えなくちゃいけないと思います。そういうことも皆さんにお考え願いたいと思います。

蜷川さんは、昔、東本願寺で「メディア」ですか、やられましたね。何年前、通りかかったら、芝増上寺で若い連中が何かをやりかけていました。例えば鳥海さんにやってもらっている国際フォーラムでのラ・フォル・ジュルネは、これは向こうのものを持ってきてあそこでやるだけですから、小屋を使わないで向こうの興行の受け売りですけれども、しかし、これもあの5月の連休に100万人以上の人が出ようになりました。そんなこんなアイデアはいろいろ出るとは思いますけれども、ひとつ突拍子もない話で結構ですから、皆さん、お出しいただきたいと思います。

蜷川評議員

身体的なパフォーマンスの部門として、どうも肉体がかかわるものなんていかがわしいと思います。文化的に上昇しないで、ノイズを生みながら公演があるといいなど。僕は増上寺も本願寺も花園神社も全部やりました。それで、今度も同時に3カ所でや

らないか、一遍にやろうと。

それから、もう一つは外国へよく呼ばれて行っているのですが、どうも頭打ちだなと。「行くより来い。俺達の芝居は持っていけない」と。例えばこの間ロンドンでやったのは、100人の出演者を要求したら、とてもじゃないけど出せないわけです。

何年か続ければ、外国からどんどん来ればいいじゃないかというふうにして、全く価値を転倒させていく。そういう形で演劇の公演、それから先ほどの勘三郎さんの話もそうですけれども、その中身をもっと活性化して、自分たちのオリジナリティのあるものをどんどん提供していく。これを契機にそういうふうになっていくといいなと。「まずは、来い」と。

それから、「世界に対してフェアに闘おうぜ」と。「フェアに評価しろよ」と。ちょっと荒々しい、たかが肉体を媒介にしているものですから、ちょっと逸脱ありの活力があるものができるといいなというのが僕らの基本的な願いで、ヨーロッパ、アジア、日本と組みながら、日本にしかないような寺社仏閣を使いながら、活力ある空間があって、街頭演劇も含めて、わくわくするようになるといいなと思っています。

福原会長

場を造り上げるということですね。

蜷川評議員

そうですね。それと中身。ヨーロッパへ我々も行くだけではなくて、あるいは部分を見てもらうだけではなくて、まず外国から来いと。来てもらう。そういう場を大胆に設定していかないかということです。

福原会長

刺激的なものを造り上げるのですね。

蜷川評議員

中身の問題ですね。勘三郎さんとか、みんなが協力し合ったりすれば、新しいものができないかと考えております。

安藤評議員

確かに今言われたように、探せば東京にもいろいろなものがあります。それを活かせる枠組みというか、きっかけがあれば可能性はあると思います。

20年前に唐十郎さんの芝居小屋を隅田川の浅草寺の横に造ったことがあります。仮設の芝居小屋で、初め、1ヶ月ぐらいの予定が好評のため延期されて、結局3ヶ月

ぐらい続きました。簡単な小屋でしたけれども、日常見慣れた場所に突然広場にそういうものが出現すると、芝居なんか縁遠い人でも面白がって結構見に来ていました。やはり場をつくるにしても、意外性というか何かハプニングを起こす仕掛けがあると良いですね。唐十郎さんのはそれ切りになってしまいましたが、ああいう仮設のものがあちこちに移動していくのもおもしろいと思います。

石原知事

三宅さん、ファッションショーなんか、今行われている在来のああいう限られた舞台ではなしに、とんでもないところの空間でできないのですか。

三宅評議員

我々は最初にやり始めたころは、ホテルとかそういうところではない、駐車場とか、いろいろなところでやっていたのです。我々も日本で活動しても、評論家とかそういう人はいないわけだから、海外へ行った方が早いということです。ずっとやってきたわけです。けれども、今、JFW(日本ファッション・ウィーク)とかで、やらないよりやった方がいいと僕は思いましたので、陰でいろいろ手伝ったりしているのです。

今我々の21\_21DESIGNSIGHTでは、海外のデザイナーを含めて、日本人、海外で勉強してきた20代の人たちが自分たちのブランドを立ち上げた場合どうなるかというので、6つのブースをつくってやっているのです。

それを見て思ったのは、非常に力がある。基本がしっかりした教育をされているということ。これから、クリエイティブな仕事に関わった人は国籍を忘れて良いのだと。忘れなきゃダメなのです。今日も話を聞いて、東京都は日本より大きいような気がするのです。

そこに必要なのは、基本力といいますが、基礎力です。催事や箱物もいいですが、今東京牛乳とか東京何とかとブランド物をやっていらっしゃるのですが、実際には物をつくるのが東京周辺では昔からあったわけです。けれども、例えば私が関係している繊維産業でもほとんど消えようとしている。

お金という問題ではなくて、その仕事がおもしろいということがわかる若い人たちはたくさんいると思うし、東京都の職員の方も、そこに行って一緒に仕事をされたらどうかと思っているのです。現場を持たない限りは、どんなことをやっても人まねで終わると思います。今、日本全国あちこち、見て回っているのですが、夫婦でやっていらっしゃるところとか、それで文化が終わってしまうのかと。人間国宝に指定され



たから継続しているというぐらいのところですよ。

最後のチャンスと思っています。例えば都というのは、日本を代表して、日本より大きいのだと。それからもう一つは、ヨーロッパや世界とつながっているのは都であって、日本というのは抽象的な存在なのです。しょっちゅう騒動ばかり起こしているだけで、尊敬もされていないという国だと思うのです。例えば富士吉田とか、昔絹織物で非常に有名なところだったのですが、そこへ行ったら、最後の工場があって、今は若い人がたくさん帰ってきているのです。そうやって仕事がおもしろいぞということを見せるということ。

東京都という意識をもっと広げて、関東圏に、あるいは日本全土に、あるいはほかの国とも提携するとか。今回のJFWの企画でもオランダやベルギー、それからイスラエルとか、いろいろな人々が参加しているのですが、3カ月とか半年ぐらい日本へも来て、滞在してもらいたい。日本は実は素材の宝庫の国なのです。だけれども、それが今沈んでいる。10年20年のうちに、日本に活気があるということをつくっていった方が良くと思います。

石原知事

さっき蜷川さんが言われた見に来いというのはとても大事ですけども、日本人というのはそういうメッセージを出せないのです。

ご参考に申しますと、とにかく東京は飯がうまいのです。ワールドカップをやったときに、イギリスのサッカーのファンが、近くの飲み屋に行ったり、焼き鳥屋に行ったり、おでん屋へ行っても、とにかくうまいということを皆感心していたというのはイギリスの大使から聞きました。すしだって、日本人はすしがうまいぞということを手人に言ったことはない。

もうちょっと自己主張というのか、表現力はあるけれども、世界の中で識者が評価をするのを日本人はただ待っているだけです。

福原会長

ありがとうございました。今三宅評議員と知事からこもごも話があったのは大変重要なことであって、東京というのは、日本のシンボルを超えているかもしれません。それからもう一つは、言われたように、東京というのは世界をつないでいることであって、日本がつないでいると思えないことは間違いないと思います。

しからは、今ちょうど時代の変わり目で、古いものがまだ人を含めてつながってい

るというこのわずかな残された期間に、そこに新しいクリエイティブなものを含めて、若者をどのように刺激して、その人たちがそれを継いでいく、あるいはさらに発展させるようなことを東京ができるかということが、逆に言えば東京都の課題であると同ったのですが、そういうことでよろしいですか。

杉本評議員

今知事から外国から人が見に来てくれるようなところにするという発言がありました。我々はどうしても日本から世界に発信するとか、日本の文化を世界に発信すると思いがちです。僕から見ると、もう既に日本の文化は既に浸透してしまって、世界の中で分け隔てなく影響を与えてしまっている。

だから、逆に世界の方を日本に取り込んでじゃう。東京都で世界を取り込んでしまって、そこからもう一回発信させるというような考え方の方がいいと思うのです。というのは、例えば都美館のプログラムで、何も現代美術館もいっぱいあるのに、またわざわざ事務局をつくってキュレーションして展覧会をやることはないと思うのです。それよりも、2年に1回、3年に1回ぐらいのトリエンナーレとかビエンナーレみたいな形式で、こちらから外国人の有能なキュレーターなり美術館の館長なりを指名コンペで指名して、その人たちに例えば大規模なアイデアを展覧会の根本テーマを考えてもらって、それで我々がこの3人とか5人の中からこれでやろうじゃないかと。そのためには3年分の予算を全部使って、世界中が驚くような企画を考えてもらう。

ですから、敵味方ではなくて、敵を取り込んでしまって、我々は世界の中心の一つだという基本的な態度をグローバルスタンダードに変えてしまうような考え方で、東京都の文化会議の戦略が世界戦略の一部になっているぐらいのスケールで考えないと、世界からは太平洋の小島というような、亜熱帯モンスーン気候の小国みたいにしかとらえられないです。

東京は、ニューヨークもそうですが、アーティストが住めない場所になってきているのです。今一番アーティストの活力があるのはベルリンです。というのは、東ベルリンが併合されてから、ずっと暖房も冷房もないようなビルがたくさん残っているのです。行政で何かやってもアートとか文化というのは生まれてこなくて、自然発生的にそういうところに流れているのです。

東京の場合には、まだ東京内でも地価が安いとか、そういうところを活用すれば、世界中から、こんな安いところでアートが自由にできるということで、活性化の可能

性は出てくる。そういう意味でも、グローバルにそれを考えていくということを思います。

福原会長

かつてのニューヨークのソーホーのロフトが今やギャラリー街になっちゃったというのと同じようなことなのですね。

杉本評議員

ソーホーのロフトは、60年代に非合法だったのです。ソーホーに住んではいけないのです。そこにゲリラ的に住み始めてアートが生まれました。ですから、東京都もそういう非合法的なアーティストを大目に見るような、それを合法的にして、そういうものを誘致するといいますが、何かそういう行政の範囲におさまらないところがアートのおもしろさなのです。

三宅評議員

日本で何かやると、日本に海外のジャーナリストなどが来るとかと言いますがけれども、決してほかの国でそういうふうになっているとは思わないのです。例えばボブ・ウィルソンとかいろいろなすぐれた前衛的なアーティストなどは、自分の国では評価されない。アメリカはあまりにもコンサバティブなので、アメリカでは評価されない。そうするとパリに行く。パリでものすごい歓迎を受ける。それから、フォーサイスにしても、アメリカでは全然受けない。ドイツに行く。

そうやって、アーティストとはみんな自分の行動で評価されるような方法論を見つけなきゃいけないと思うのです。そして、そこで何か起きたら世界に伝わっていくのだというので、日本に居ながらにして外国から来てくれなんていうのは、ちょっと虫のいい話かなと。旅費は高いですし。

だから、活発な活動で表現をどう伝えるのかということと、両方必要な部分だと思います。

日本に人を呼ぶとなると、大体においてお年寄りの権威が来る。東京は権威になったらだめです。若くないと。

杉本評議員

ただ、日本だけで国際発信力があるキュレーターというのは、数えるために10本の指が要らないぐらいです。結局国際的に通用する国際人がいないのです。ですから、それだったら最初からグローバルにしたほうが良いし、こちらから指名する場合には、

外国でも権力の中でも若い人を選ぶ自由があるのです。日本のヒエラルキーの中にあるいろいろな団体がありますがけれども、ここは東京都の中でそういうしがらみのない人たちだけで、世界スタンダードがわかっている人たちだけで世界を選び直す。これは十分可能だと思うのです。

日本の世界というのは年功序列になっていますから、どうしても決定権がお年寄りに移ってしまうというのは、これはやはり弊害です。おもしろいことを考えるには、世界中の人材を募った方が良いのです。

宮本評議員

今のお話は大変おもしろく伺いました。先ほど、僕は音楽世界のことだけで申し上げましたけれども、やはりプロモーションは必要だと思うのです。そのプロモーションというのに、例えば我々の音楽世界のこと、批評家 i n レジデンスみたいなことを申し上げましたけれども、決して年寄りばかりでなく、若い、そういうことをすくい取って世界に東京で行われていることを伝える人を常駐させるような方向に持っていけると良いだろうと思います。そうでないと、やっていると言っても、それが世界に知れ渡らないことには、では、行ってみようか、あるいはそれはおもしろいねというふうに思ってもらえないと思います。

僕も30数年間ドイツにおりまして、日本にちょっと前に帰ってきて、日本のヒエラルキーというのですか、そういうものにたくさん突き当たって、目の当たりにして、自分がそういうことに取り込まれないようにしている人間なので、そういうところと闘わなきゃいけないなと思っているのです。決してここからの発信という田舎的な考え方ではないのですが、このままにしておくと、例えばアジアだと、上海あたりにしてやられてしまうのではないかなという気持ちになってしまいます。

日本、特に東京というのは、本当は古い歴史があった。その古い歴史はちゃんと見つけていかなければいけないし、それを壊さないようにしなければいけないことも確かですけども、例えば戦争でたくさん壊されてしまってほとんど何もなくなったところから始めているわけです。そういう意味から言うと、えも言われぬ混沌としたところからでき上がっているこの都市というのを非常におもしろく世界的に発信していくために、いろいろな発信方法、プロモーション方法というのを考えていくということが、オリンピックにもつながっていくのではないかと思います。

皆さん、素晴らしいことをお持ちなので、それを上手に世界にプロモーションして、

いつの間にか東京というのはすごいところだということを知ってもらえるような方向に持っていくということでしょうか。

石原知事

宮本さんが言われたプロモーションに一つ関係がある。皆さんにアイデアをいただきたいのですが、毎年やっている東京国際映画祭ですが、実にくだらんもので、場所もよくないし、何の芸もなくなりました。そこで例えば、いろいろなところでグランプリを取った映画を3番目ぐらいまで集めて、本当の金・銀・銅を決めるみたいな映画祭にしたらいいのではないかと思います。日本の映画もこのごろ復活してきたし、何か知恵を出してやってください。

三宅評議員

やはり熱を持った人が企画をし、やっていかなきゃいけない。それから、一般の人はそういうものをおもしろがるということも必要ですから、それに対するプロモーションも必要だと思います。日本でやっているのは、オーガナイズだけされて、外国の有名な女優が来たりして、珍しがっている。それではまずいなという感じがします。

福田評議員

映画祭は、日本で一番国際的に権威のあるのは山形です。あれは世界中から作品が来て、アーティストも来て、15年ぐらいですか、かなり長くやっていて、ドキュメンタリーだけに絞ってやっている。山形市という自治体のスタイルと合った水準のイベントを行って、ドキュメンタリーの中では国際的にかなり高く評価をされている。そういうような何か絞って重点的に長くやるということがないと厳しいですね。

森評議員

東京国際映画祭は、六本木ヒルズのヴァージンシネマズを会場として、この数年お貸しして一緒にやっていますけれども、角川さんは大変情熱的にやられて、随分良くなってきたなと思っているのですが、基本的に日本はとてもパーティとかそういうイベントをやるのが下手だなと思います。

外国のまねをするだけが良いわけではないですけれども、パーティというか、イベントのやり方を少し研究しなきゃいけないと。映画祭は結局映画の売り買いです。いい映画を買い手が来て買うという、マーチャンダイジングを上手にやる必要がある。少しずつ上がってきたとは思っていますけれども、もっと人を呼んで活発にやるということがポイントじゃないかなと思っています。

三宅評議員

私は背景を全く知らないのですが、いずれにしても、続けなきゃいけませんよね。途中でやめるというのはどこかに欠点があるからやめると思うのですが、まず続ける。そういう決心をして立ち上げるということが必要なんじゃないかと思います。

石原知事

スパルバークと、「ラストサムライ」に出たアメリカの俳優が来たときに、騒ぎになるからと、レッドカーペットも敷かないで裏口から入れるのです。騒ぎにしなきゃだめじゃないですか。そこら辺が違うと思いますけれどもね。

森評議員

例えば8月1日封切りというと、8月1日が来るのは世界で日本が一番最初なので、各映画会社は日本でオープニングをやりたがるのです。六本木ヒルズのアリーナで、トム・クルーズも来ましたし、この間「オーシャンズ13」のオープニングも、レッドカーペットを敷いてかなり華やかにやっております。

鳥海評議員

これは何も東京だけではなく、魅力がなきゃ人は集まらないです。魅力をつくるということが一番大切なことであって、ラ・フォル・ジュルネなんかは、輸入物ですけども、ナントのまちとは全く違います。新しい文化がそこにでき上がったのです。それは数日間やって15万人しか来ないエンターテインメントと、100万人来るところとは全然違います。

そこで、宮本さんがここにおられますけれども、アーティストが喜ぶのです。経営者と違って、アーティストは皆拍手をもらいますから、経営者は拍手をもらえるというのはまずないでしょう。

石原知事

ナントとどういうふうに違うのですか。

鳥海評議員

それは、ナント15万人に対して100万人の人が、わずか1週間のところで動いて、しかも、ただほど人が集まるとは思いますが、全くそのとおりです。平均1,500円ぐらいで、約600ステージぐらいあるうちの有料は約200ステージですから、あとはみんなただです。

それは魅力があるから集まる。それから、そういうようなことで人がまず集まって

くれれば、必ずリピーターが出てきます。今統計を4年間ずっととっておりますけれども、リピーターがすごく増えてきています。それと、その話を聞いて、今みたいにインターネットが盛んですから、相当早くから申し込みがあるということです。

もう一つは、地域もそうですけれども、どこの地域も、東京都の中がお互いに切磋琢磨して、まず競争する。競争と協調というのは、これからの10何年間20年間の一番いいテーマはハーモニーだと私は思います。例えば今の大手町とか丸の内、有楽町があれだけになったのは、地域全体が一つのフィロソフィーでやっているからです。それも約20年間かかってやっているわけです。そう簡単に人は集まらないですけれども、また行政がそれを支援しているというところもあると思います。

例えば私が見ております都響にしましても、14億円都から出ていた補助が今9億円です。大体最低90人アーティストがいけないといけない。85人しかいないのです。いざオリンピックが来た時、だれが演奏するのですか。

例えば今度9月には札幌へ連れて行ってやろうと思っているのですけれども、事務員とか入れますと、120人ぐらいとなり、わずか2日間の公演でも相当のお金がかかります。やはり公的な支援というのは大切だと思うのです。今9億円のうち8割強が人件費です。アーティストは、本当に下積みの方が多いのです。その人たちの報酬は、いかに少ないかということです。報酬を上げてやるようなシステムをつくってやらないと、アーティストは育たないのかなという感じがするのです。

文化庁の河合さんは、ラ・フォル・ジュルネだけで私どもに5,000万円の金を出しています。それから、東京都の交響楽団にはいろいろなアイテムで1億8,000万円も出してくれているのです。

ただ、これで必要なのは、東京都もこういうような評議会をつくったけれども、きちんと評価のシステムをつくるのが非常に大切だと思います。ちゃんと評価して、会計検査をきちんとする。要するに透明性を高めなかったら、幾ら財団をつくってもだめです。

いずれにしても、だんだん東京都は輝いてきていると私は思います。ただ、場所にもよります。例えば映画祭は今の六本木のところでぼつんとやってもだめだと思うのです。本当は映画館の集まっているところでやったら一番いいと思います。銀座、有楽町、日比谷辺りのところが一番良いですから、地域の協力を得てある期間をそれぞれで埋めるというようなことをすれば良いと思います。

これからは都の行政がそういうところに力を入れてほしいということです。東京都が有楽町から、それから銀座のところのどのくらい土地を持っていると思いますか。あれをつなげたら、あそこにすばらしい空間ができ上がります。物事は人々が集まりやすいところでなきゃだめです。

そこら辺のことも今後考えて、いろいろな手を打っていくということが非常に重要ではないか。そういうことを一つのところがやることによって、経営の立場からいいますと、管理費が本当に少なくて済むわけです。継続してやるということを言われましてけれども、本当に継続してやらないと意味がないと思います。

宮本評議員

継続という言葉が出ましたけれども、都が造った、例えば我々の部分だけで言いますと、中の響きがまずいというホールを東京都は持っていらっしゃる。我々にとって一番大事なのは、外観も大事ですが、中の響きなのです。それを全く改善することなくずっと来てしまっていて、これは実にもったいない。

例えば始末して売るか、あるいは良くする。または、ものすごく良いものをもう一つ持つかというような決断をしなきゃいけない。そうでないと、継続につながっていかない。例えばオリンピックに向けていろいろなコンサートをやっていく場合に、ただ物があればいいということではなくて、そこは良くなければいけない。

そうでないと、例えば批評家を呼んでも、オーケストラがウイーンから来ても、都のホールは響きが全然良くないなんてことになると思います。良くするアイデアは我々の中にもたくさんあるので、ぜひご検討をお願いしたいと思います。

福原会長

ありがとうございます。前回よりとても活発になりまして、いろいろ教えられたところがあります。東京から発信というのは大いなる田舎的な発想であって、世界と東京の中の関係性みたいなものを考えて東京をいかに活性化するかということを考えなきゃならないというふうな認識も生まれてくるでしょう。それから、鳥海評議員が言われたような評価制度のようなもの、宮本さんの言われたような既存ホールをいかにして良くしていくかというような、すべてのことを含めて考えていかなきゃならないと思うわけです。けれども、何せ今まで東京の10年後なんていうのを組織的に考えたことはなかったと思いますので、まずは建設の方を考えて、おいおい評価の方もこれに伴って考えていかなければいけないというのが今の私の感想でございます。



きょうは専門委員の方々にもご意見をいただく予定でしたが、あまり活発でございましたので、後ほど、どうしてもということをご発言いただくように考えております。

ただいまのような皆さんのいろいろなアイデア、あるいはいろいろな物の考え方をご提示いただきましたので、事務局は、きょうの議論を踏まえて、具体的な事業化の検討に織り込むということにさせていただきたいと思います。

それから、これは知事をお願いでございますけれども、世界都市・東京の実現とオリンピック招致機運醸成のための文化事業につきましては、きょうの議論を踏まえて、予算面、文化事業を着実に実施するための執行体制を含めた条件整備をぜひご検討いただきたいというふうをお願いする次第でございます。また、芸術文化発信事業助成についても、提案を踏まえ積極的な取組をお願いしたいと思います。

それから、きょうの議題の第2番目になりますが、キャッチコピーのご検討をいただきたいと考えております。

それは、昨年、都が発表いたしました10年後の東京というペーパーにおきまして、10年後の東京の姿として二つを提示しているわけです。その二つというのは、一つは、東京ならではの文化の創造・発信が活発に行われて、文化面でのプレゼンスを確立し、アジアの文化の中心となっているということがそこで示された提案でございます。

第2番目に、東京から発信する文化を通じて、アジアをはじめとする世界のさまざまな都市との交流が深まっているというようなことをイメージしたわけですが、前回の評議会でも、この目標に向けて、東京全体で、都民も巻き込んだ広範なムーブメントを巻き起こすようなキャッチコピーが必要だというようなご意見があったわけです。

そこで、このキャッチコピーをどのような方向で、あるいはどうやってつくったらいいかというようなことについて、皆様のアイデアがあればぜひお聞かせをいただきたいと思います。多分キャッチコピーをつくらなきゃならないということについては、皆さんご賛同だと思っておりますが、例えば「アイ・ラブ・ニューヨーク」というのがありました。そういうような例があるわけですが、何かご意見はありますか。

野村評議員

能を大成した世阿弥の『風姿花伝』という本の中に、「花は心、種は態なるべし」という言葉があるのです。稽古によって蓄積された技を心の工夫によって花を咲かせ

るという意味です。耕された大地というものがちゃんとなければ、幾ら種をつくってまいたって花は咲かない。そうすると、本当に東京というところが耕された大地として文化のためになっているのか。まだまだ大地づくりというものにご努力をいただかなくちゃならないのか。そんなことを苦し紛れに思いついたりしました。

それから、世に老壮青という3世代から文化を考えたときには、老と青には、施策が割合浸透しているように私は感ずるのです。けれども、一番老を支えて青を導かなくちゃならない壮という世代に視点を当てた文化政策と言いますか、その方向が本当に見えるのかどうか。そこら辺が一工夫あっていいのかな。ちょっとキャッチコピーとは結びつきにくいかもしれないですけども、そんなことを愚考いたしました。

福原会長

ありがとうございました。これは、間接には結びつくわけです。

福田評議員

このキャッチコピーというのは、国内向けのプロモーションなのか、それとも国際舞台に持って行って世界的に流通させるためのキャッチコピーなのか、どちらかで性格が大分違うと思うのです。

福原会長

これは私の考えですけども、世界向けにもつukらないといけないと思うのです。「アイ・ラブ・ニューヨーク」というのも確かに世界的ではあるけれども、国内的でもあったのです。そのような性格を持つものであるべきではないかと個人的には思うわけです。

福田評議員

そうだとすれば、先ほど杉本さんがおっしゃったような形で、日本人だけではなくて、国際的な知恵を借りるという戦略が一方では必要になるのですかね。

杉本評議員

国際標準語となると英語になりますよね。そうすると、「ロスト・イン東京」はどうですか。東京でロストする。ここに来て、わけがわからなくなってくださいと。これは映画で大ヒットしましたから、非常に流通力があると思うので、逆向きの姿勢でもっておもしろいというような東京の現状もあらわしているかもしれません。

福原会長

たちまち具体化しました。

石原知事

それは反対ですね。逆説はなかなかポジティブにとらえられない。やはり英語では、「ザ・サンライズ・フロム・トーキョー」です。

福原会長

それはどうでしょうか。ほかにどうぞ。ただいま決めるわけではなくて、皆様のアイデアをいただくわけです。

森評議員

環境問題と、それから今東京都が取り組んでいらっしゃる緑化の問題、屋上緑化とか校庭の緑化とかと、あとはいろいろな文化をクリエイティブしていくという意味で、「クリーン・グリーン・クリエイティブ都市東京」。あとは石原知事がいろいろなものがカクテルのように混ざって文化をつくるという「カクテル」という言葉を使っていらっしゃるので、「アーツ・カクテル都市東京」。あとは、「文化発信都市東京」とか、そんなものも考えてみました。

石原知事

「クリーン・グリーン・クリエイティブ東京」でいいじゃないですか。

森評議員

都市はない方がよろしいでしょうか。

石原知事

東京は都市です。

森評議員

調子は「クリーン・グリーン・クリエイティブ東京」がとてもいいですね。

石原知事

なかなか大したものですね。

安藤評議員

クリーン・グリーンはいいですけども、ちょっと長いことはないですか。

石原知事

長くないと思いますよ。

杉本評議員

分かり易くないといけませんね。

石原知事

「ロスト・イン東京」では分からない。

鳥海評議員

今東京都は、安全・安心というのをやっています。これは入れた方が良いでしょう。今安全だ、安心なんて世界で言う人はいないです。昔は、安全と安心だったのだから、それをクリーン・グリーン・クリエイティブと一緒に入れてみたらどうですか。本当にそれでもって、何も起こらないで終わったということになれば、ロスト・イン・東京になりませんから。

福原会長

またアイデアをいただきましたけれども、このリスク対策がなかなか難しいですね。

石原知事

都民の意識調査も、やはり安心・安全です。子どものしつけも含めて、いろいろな不満とか不安というのがばっこしています。

宮本評議員

すべてのことが実現できるようなまちであるということで、誇りだとかプライドだとか、そういうような言葉が入っていても良いのかなという気もしました。東京はグリーンに対してプライドを持ちます、誇りを持っていますとか、安全ということも我々はプライドを持って、また誇りを持ってそれを実現していきますということで、そういうような方向もありかと思いました。

安藤評議員

現代の世界情勢を考えると、安全で安心というのはパンチがあると思います。環境の問題でも、今年はこんなに暑いので、皆日本人もどうなるのかと不安になっている。安全・安心というのは、言葉がちょっと弱いですが、何か言い方があるのかなと思います。

石原知事

安心・安全というのは分かるけれども、アーツカウンシルにとっては、あまり……。

鳥海評議員

人が集まりますから……。

石原知事

二義的な問題ですよ。

鳥海評議員

先ほどのアーティストのための地域をつくったりすることは、全くそうだと思うのです。ナントというのはそれで蘇ったのですから。

福原会長

ありがとうございます。いろいろアイデアのヒントをいただいたわけですから、これをもとにどうやって考えるか、あるいはどのように選定するかということを含めて、候補を来年の第3回評議会で皆様にお諮りするようさせていただきます。

その次に、東京キャンペーンマークがあるべきではないだろうかという提案をいたします。

オリンピック招致活動が本格化しようとしているわけですが、そうなりますと、国内外、これも主として国外、そして、当然国内にも東京をアピールする機会が増えると思います。東京のマークというのは、明治年間に決められたお日様が放射状に光を放っているという古い、これは東京都の正式紋章です。それから、CIがはやりました時代に、現在の「T」の字をグリーンにしたマークというのが決められているわけですが、そうではなくて、この期間に使えるようなものがあるべきではないかということをお諮りするわけです。

ここにご覧いただいているのは、これはオリンピックではありませんけれども、ニューヨーク州の観光キャンペーンのための「アイ・ラブ・ニューヨーク」という、大変有名になったマークです。

それから、ロンドンのキャンペーン用マークには、「TOTALLY LONDON」というのが使われていたそうです。

それとは別に、英国政府の観光キャンペーン用マーク「visit Britain」というのがあるそうです。こういうものというのは、いろいろなところに共通に使われて、一つのキャンペーン用のイメージをつくるのではないかという提案ですが、いかがでしょうか。

石原知事

あのイチヨウの葉っぱに似たのは、「T」をもじったというのだけれども、つまらんなと……。

福原会長

あれは、別に私は擁護する立場ではないのですが、緑にしちゃったからイチヨウだ

と思うのです。これは変えることなく、東京のシンボルマークとして使っていく。ただ、キャンペーン用に今のような時限的なキャッチマークをつくるべきではないかというご提案でございます。

石原知事

昔のやつも今のやつもそうですけれども、二つともちっとも東京の魅力を感じさせない。

福原会長

もし、皆様のご賛成でありますれば、少しこの方向で検討させていただきたいと考えております。今世界のデザイン界でご活躍の三宅評議員に選定委員に加わっていただいて、どうやってこれを考えていくかということをお考えいただければと思うのですが、いかがでしょうか。

三宅評議員

構わないですが、ただ、この選定というのは非常に難しいのです。幾つかの選定にかかわったことがあります。まず、MOT（東京都現代美術館）のロゴの選定のときは7名ぐらいの参加者がいて、それも指名してコンペしたわけです。それから、先日の例のミッドタウンも一般公募をとっています。何千通というのが来るのですが、キャラクターが消えてしまう。もっと良いものをつくれたと思いますが、あれも選考で二つに割れました。

石原知事

それは何の……。

三宅評議員

MOT、木場の東京都の現代美術館です。

ミッドタウンは僕が関係しているのですが、コンペというのは難しいというのが結論で、もしやるとすれば、いろいろなことを聞きながら、3人から5人ぐらいの人の今までの仕事をまず見せてもらって、それで、よし、この人でいこうという人で深く考えた方が、強いものができる。

石原知事

都立大学を統合した首都大学東京のマークは非常に良いものがありました。

三宅評議員

3人のコンペなどでやりますと、どうしてもその間で摩擦が生まれるだけでいいも

のができないです。最後にこの人だということでやらせた方が良くと思います。来年は北京オリンピックがありますから、行き帰りに東京に人がたくさん寄ると思います。これは東京をアピールするのに、いろいろな意味でチャンスだなと思います。

福原会長

東京をアピールするようなマークをつくるという方向で、今の選定方法等につきましては、過去のご経験を含めて、三宅評議員に加わっていただいておりますということでは、いかがでしょうか。

三宅評議員

少し賢くなって、いい方法を選びます。

福原会長

よろしく願いをいたします。

そして、もう少しお話しいたしますと、都市東京の力とかエネルギーを示すような力強さが表現されていて、海外の人々にも東京のマークだというふうに認識され、受け入れられるものであるべきだと思います。

もう一つは、いろいろな企業がマークをこのところ変えたりしておりますけれども、企業名をロゴマークにデザインするというのも一つの流行でもあるので、これは100年使うということではありませんので、そうなりますと、東京という名前が入ったデザインというのもあり得ると考えています。

それから、10年後というか、あるいはオリンピックを目指しての東京を目指す上でのスローガンと一緒に盛り込んであるようなマークというのもあるべきではないかと考えているわけですが、そういうことを含めて、ぜひお考えをいただければと思うのですが、よろしゅうございますか。

では、そのように進めさせていただきます。

三宅評議員以外の選定委員をどうするかとか、あるいは先ほどお話ししたような選定委員会の運営というのはどういうことにするのが一番クリエイティブなものを選べるかということにつきましては、都の所管部署にお願いをしなければいけないと思うわけですが、いずれにしても、できればその結果、候補マークを評議会に報告をしていただくという段取りにしたいと思いますが、よろしゅうございませうか。

それでは、オリンピック文化プログラムについてですけれども、冒頭に申し上げたとおり、この件については非公開で論議いたしますので、大変恐縮でございますけれ

ども、報道関係の方々はここでご退出をいただきたいと思います。よろしくお願ひします。

《以下非公開》

午後3時59分閉会